
死神 研修中！！

篠宮 涼子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神
研修中！！

【ZU-1】

N
4
1
8
1
F

【作者名】

篠宮 涼子

【あらすじ】

普通の生活を営む高校生、石神雅人が死神研修中のイルヴィーナとその他愉快的仲間達によって、非日常な世界に放り込まれる。フアンタジーな世界なんて、全部夢だあああああ！！！！！！！！！！

第一話：いつでも出会いは突然。

「じゃーな、マサトー」

「おう、じゃーなー」

何の変哲もない学校の帰り道。

部活を終えて、友人と別れて帰り道。

カバンからmp3プレイヤーを取り出し、イヤホンを耳にかけ。

その瞬間、後ろから「あの・・・」と声をかけられた。

石神 雅人。普通の16歳、高校1年聖の秋だった。

バレー部でそこそこ運動して、授業中はそこそこ転寝をして怒られて。

そこそこ可愛い女の子の話をして。

高校を出たら大学に行って、社会人になる。

「この世の中」の歯車のひとつになるのだと、自然と受け入れた。

そんな「普通の人生」を送る人間が世の中の大半だ。

他人と違う何か「特別」に憧れたときもあった。

そんな自分を今、激しく反省している今この瞬間。

「あの・・・私、死神のイルヴィーナと申します。なので、あなたの命を頂にきました！」

「・・・・・・・・・・・・はい？」

声をかけられて振り向いたそこには・・・。

自分よりも50cmは身長が低いと思われる女の子が立っていた。

小学生くらいだろうか。

ただ、その身なりは黒い布をまとい、手には大きな鎌を持っている。

マサトを見つめる目は真剣だ。

「えーっと・・・君、お母さんとかは・・・？」

聞いたことはなかったことにして、きょろきょろとあたりを見回す。

「えいつ」

大きな鎌が振り下ろされる。

「うわっ・・・」

とつさにマサトはよける。

ザシュッと重そうな音とともに、鎌はコンクリートの道路に突き刺さる。

「あ・・・」

どうやら抜けないらしい。

「えーっと・・・じゃ、そういうことで！」

マサトは少女に背を向けて一目散に走り出した。

（何だ、今のは。）

（新手の通り魔か?!?!）

（いや、何もなかった、俺は誰にも会っていない!!!!!!）

後ろを振り返ることなく、一人暮らしをするマンションまで全力疾走で駆け抜けた。

「はぁ・・・疲れた・・・」

息を整えながらマンションの2階へと階段を上がっていく。

運動部にかなり力を入れている私立稜蘭学園には、県外からの学生も多く、学校の近くには学生が一人暮らしできるようなマンションやアパートが多い。

マサトもそんな県外遠征組の一人だ。

「ったく・・・何だっただんだ・・・」

階段を上りきると、ふと顔を上げる。

ドアの前に人影が一つ。

「な・・・」

人影と目が合う。

もちろんその人影はさきほどの小学生。

くるつと踵を返したとき、すぐ後ろにいた人にぶつかる。

「ぶ・・・すいません」

「いえ・・・」

ぶつかった人は、小学生と同じ黒い布を身にまとい、大きな鎌を持っていた。

第二話：厄介なのは一人じゃないの？

「・・・・・・・・粗茶ですが・・・・・・・・」

「どうぞ、お構いなく」

テーブルを挟み、目の前には先ほどのデンジャラス小学生と、ぶつかってしまったその保護者？らしき人。

なぜか彼らは家に上がりこんでいる。

そしてなぜか俺は彼らに茶を出している。

「・・・・・・・・」

ずずずとお茶をすすする音がむなしく部屋に響く。

「申し送れました、私は死神育成担当のレインデールと申します。こっちは研修中のイルヴィーナと申します」

「・・・・・・・・」

いや、さっき死神がなんだかんだ聞こえたのは空耳にしたかったのだが・・。

こちらが何も言わないことを、話を促していると捉えたのか、続きを話し出す。

「今回はご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。イルは本日が研修初日です、まだ講義も終了しておらず、本来であれば・・」

「ちょーっつと待った！！！」

レインデールと名乗った男の話の途中だったが、マサトは口を挟む。

今何を言われてもマサトの脳細胞は考えることを放棄してしまう。

疑問は一つずつ解決を、だ。

だが、そのまえに人間は「夢見る生物」である。

「あのさ、あんたらが何者でもいいんだけど……。帰って二度と俺に近づかない、つてのはどうよ？ 今なら俺はまだ「夢だった」で済むんだけど……」

「はぁ……。申し訳ないですが、そのご提案には同意いたしかねます」

マサトの提案はあっさり却下された。

「だからー、あたしはあなたの命をいただければ研修一つ終了なの！ 痛くしないように頑張るから、ね」

にこつと微笑むデンジャラス小学生。

「誰がはいそうですか、つて命を差し出すか・・デンジャラスなヤツめ・・」

「通常は……。死神が姿を見せることもないですし、話をするなんてまずありえません。痛いかどうかは本人次第ですし……。そもそも、人の命を取るかどうか最初から決まっているわけではありません。過去を拝見させていただき、未来を考慮して決定しています。そついったことを伝える前に・・その、お恥ずかしい話、私が迷子

になってしまい、イルを見失ってしまつて・・・」

・・・。

飼い主失格軟弱男と名付けよう。

「わかつた。とりあえず夢ではすまないことまで理解したでしょう」
両手を挙げて降参ポーズをとる。

「で。何で俺が殺されなきゃなんないわけ？」

デンジヤラス小学生と飼い主失格軟弱男が見つめあう。

「それについては、お答えいたしかねます。過去か未来、どちらかに理由がある、とだけしか・・・」

ふざけんな。

過去に死ななきゃならんほどの罪を犯した覚えもないし、今後も歴史に残るような犯罪者になるつもりもない。

「あんな・・・」

ぴーんぽーん。

マサトが言いかけたとき、間の抜けたチャイムの音が鳴る。

というか、この客を今誰かに見られるわけにはいかない。

ワンルームのこの部屋は玄関を開ければそこが部屋だ。

まずい、非常にまずい。

ぴーんぽーん、ぴーんぽーん。

無言でデンジヤラス小学生と飼い主失格軟弱男をみ見る。

「ああ・・・普通の人には我々の姿は見えませんが、どうぞ」

飼い主失格軟弱男がずっと玄関の方を見る。

ほんとかよ・・・。

そう思いながらも、おそらく外にいる人には部屋に人がいることがバレているだろうから、少し自棄気味にドアを開ける。

「はい！」

不機嫌丸出しでドアを開けると、そこには先ほど学校帰りに別れを告げた友人真田 孝典が立っていた。

「よお、近くまで来たからさ、この前言ってたゲーム借りに来たぜ」

そういいながら部屋へ孝典は部屋へあがろうとした。
マサトの横を孝典がすり抜ける。

「あ、ちよつと待て・・・」

そうか、あいつらの姿は見えないんだっけな。
いやいや、でも湯のみが3つつもあつたら不審に・・・

「あれ、お前ら何やってんの？」

孝典以外の3人がその場に凍りつく。

もちろん「お前ら」というのは複数形であるし、マサトのことではないだろう。

（ああああああ。）

（終わった、俺の人生。犯罪者の仲間だ、きっと。もしくはアブナイお友達決定だ。）

がつくりうなだれる。

（いや、孝典の命までも?!）

はっと友人の身を案じて顔を上げるが・・・。

「タカちゃん!!」

孝典に抱きつくデンジャラス小学生。

「お久しぶりです」

挨拶をする飼主失格軟弱男。

意識が遠いどこかへ飛んでいるのは俺だけらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4181f/>

死神 研修中！！

2010年12月14日18時17分発行